

今西進化論と
小田柿生物社会学
人類の独自性を探る

笠原敏雄

心の研究室

理性を付与された唯一の存在たるこのホモ・サピエンスこそ
が、また不合理きわまるしるものにすがって生きてゆける唯一
の存在でもある。

(ベルクソン、一九六五年b、三一四ページ)

はじめに

今西錦司が1992年6月に他界すると、弟子たちによるものを中心に、新聞や雑誌に数多くの追悼文が掲載された。それに加えて、いくつかの一般誌や専門誌が、今西を追悼する特集号（『アニマ』1992年10月号；『エコソフィア』2001年第8号；『科学』2003年12月号；『生物科学』2006年4月号）^[註1]を発行した。

これを見ると、没年に刊行された最初の『アニマ』から最後の『生物科学』までの間には、14年もの開きがある。これほどの長きにわたって、専門誌や一般誌で特集が組まれ、しかも、その多くは没後10年近くを過ぎて以降であるという事実は、学界に対しても世間に対しても、大きな影響力を及ぼした科学者の死として受け止められたということもさることながら、今西錦司という個人にも多大な関心が寄せられてきたひとつの現われなのであろう。そのことは、今西の伝記的著作の出版がその後も続いていること（最近では、斎藤清明著『今西錦司伝——「すみわけ」から自然学へ』〔2014年、ミネルヴァ書房〕）を見てもわかる。今西の晩年の弟子でもある、京都大学農学部出身のジャーナリスト、斎藤清明（総合地球環境学研究所教授）は、ある出版社から児童向けの伝記の執筆を依頼されているという（斎藤清明、2020年3月1日付私信）。既に偉人として扱われる段階になっているということであろう。

今西進化論をめぐるひとつの謎

各誌の今西錦司特集号では、今西の功績を高く評価する者がほとんどであったが、やはりと言うべきか、その進化論についてはそうではない。今西が監修者となっていた、一般向け生物学雑誌である『アニマ』も、60ページを超える紙幅を割いて、今西追悼のための特別号を刊行したが、いわば第二期の一番

[註1] その間に、『プロメテウス』というマルクス主義同志会の機関誌も、編集主幹自身による、今西進化論を“糾弾”する84ページにもよる論考（林、2000年）を載せた特集号（2000年7月号）を発行している。ちなみに、編集主幹の林紘義は、ユング心理学の研究で知られる林道義の実弟である。

弟子たる伊谷純一郎の言葉を借りれば、そこでは「今西進化論に対する毀誉褒貶の甚しき」がきわ立っているという。

そのうち否定的な側について言えば、進化の仕組みや要因を明らかにしようとしないうえに、今西学説は進化論とは言えないという発言から、自然科学としては失格であるという主張を経て、今西の全体論^[註2]が消滅することを望むという放言に至るまで、現行の科学知識を信奉する陣営からの誹謗が目立つという（伊谷、1993年、512ページ）。かつて今西は、理論の「奴隷になるぐらいやったら死んだほうがよっぽどまし」（今西、小原、上山、1975年、353ページ）と鼎談の席で語っていたが、その発言からもわかるように、こうした権威をうしろ盾にした対応は、科学者ということ以前に、今西が最も嫌った隷属的生きかたなのである。

京都大学動物学科で伊谷の2年ほど後輩に当たり、今西の薫陶も受けている生物社会学者、大串^{りょういち}龍一（当時、金沢大学理学部教授）は、『日本の生態学——今西錦司とその周辺』（1992年、東海大学出版会）の中で、今西の生物社会学理論は、生物群集の構造や、個体の主体性を重視する種社会論として、科学の発展に大きく寄与したのに対して、現在の生態学者の中には今西進化論を研究上の指針とする者がほとんどいないという事実を指摘している。しかしながら、大串が率直に認めるところによれば、生物社会学理論の集大成こそが、種社会の共存理論としての今西進化論にほかならないのである（大串、1992年、33ページ；伊谷、1993年、516ページ）。

信州大学理学部の市野隆雄も、棲みわけ理論と今西進化論は「生物社会の空間的、歴史的な成り立ちをとらえる、いわば今西生物学の両輪をなすもの」と述べている（市野、2003年、1321ページ）。棲みわけ理論から今西進化論が生まれた、あるいは両者は緊密につながっているというとらえかたは、どの角度から見ても妥当な結論と言えるであろう。

この点について伊谷は、それぞれの部分が正当であるにもかかわらず、それを集大成したものが一般の支持を得られないとすれば、どこかに問題があると考えざるをえないとしている（伊谷、1993年、516ページ）。これは、当然の指摘と言わなければならない。この問題は、1941年に「遺書」として出版された『生物の世界』（弘文堂書房）に対する評価と今西進化論に対する評価とが大幅に

[註2] 伊谷は、全体論という言葉は誤解されやすいとして、「ホーリスティック・ビュー」という言葉をあえて用いている（伊谷、1993年、521ページ）。

食い違うという事実を見れば、よりはっきりするであろう。

たとえば、『生物の世界』の英語版 *A Japanese View of Nature: The World of Living Things* (RoutledgeCurzon, London, 2002) の訳者のひとりである、カルガリー大学 (現、アルバータ大学) の人類学者、パメラ・アスキス^[註3]は、次のように述べている。なお、アスキスは、今西の長男である武奈太郎^{ぶなたろう}から提供を受けた、7000 ページにもものぼるノートや原稿類を、斎藤清明とともに電子化して世界に向けて発信している「今西錦司デジタル・アーカイブ The Kinji Imanishi Digital Archive」の主宰者でもある (アスキス, 2003 年)。

今西教授の進化論および反ダーウィン流の考え方は、日本では先生自身やそのほかの人たちによっておびただしく出版され、一九八〇年代半ばには英訳されて簡単な紹介〔おそらく Imanishi, 1984 のこと。Sibatani, 1983b, 1986; Ikeda & Sibatani, 1995 も参照のこと〕がなされた。しかしながら、私もそうなのだが、ほとんどの学者がこの説に少しも納得できないままである。そうしてみても意味があるとは思えないのでダーウィン説と今西説を比較するつもりはない。比較したら今西説のほうが不十分だということになるだろう。(アスキス, 1992 年, 51 ページ)

『生物の世界』をあまり評価しない生物学者は、今でもほとんどいないように見えるのに対して、今西進化論を評価する生物学者もほとんどいない (アスキス, 1988 年参照)。ところが、今西進化論は、『生物の世界』での論考を発展させたものなのである。それに対して、たとえば経済史学者、川勝平太 (現、静岡県知事) は、生物学者ではないが、進化論を含め、今西の著書や考えかたに高い評価を与えているにもかかわらず、今西の仕事で本当に残るのは、「カゲロウの研究と、垂直分布について書かれた山岳論ではないか」と述べている (松原, 川勝, 日高, 本多, 2003 年, 1369 ページ)。なぜこのようなことになるのか。

今西は、『生物の世界』でどのようなことを述べていたのであろうか。その

[註3] パメラ・アスキスに今西の生物学を紹介したのは、同時期にオクスフォード大学に留学していた、晩年の今西の対談相手も務めた川勝平太であった (川勝, 1993 年, 8 ページ)。アスキスは、その後、1981 年から 83 年にかけて文部省の研究員として京都大学に籍を置き、日本の霊長類学について研究 (アスキス, 1984 年) し、帰国後に『生物の世界』の英語訳にとり組むことになる (アスキス, 1992 年, 50-51 ページ)。

最終章では、冒頭から種社会という用語が登場し、「地縁的共同體としての生物の全體社會が、われわれの眼に映るありのままの自然であり、一方では個體から種社會、同位社會、同位複合社會と綜合していつた最後のな、その意味では唯一な生物の全體社會でもある」(今西, 1941年, 142ページ)という、後の生物社会学の階層構造が早くも打ち出されていた。また、哺乳類は「爬蟲類の時代にすでにその爬蟲類の社會自身のうちに胚胎されてゐたものと考へざるを得ない。〔中略〕爬蟲類が哺乳類に變態したと見れば、それは續いてゐるのである」(同書, 159ページ)という、後年のいわば種社会変容説の大進化版の原型とも言えるものや、「種は雑交しないから種であり、素質の純潔を守るから種なのである。だから個體には何等かの方法によつて、自己の屬する種の個體と、自己の屬さぬ種の個體とを識別する能力があるのであらう」(同書, 187-188ページ)という認識を表明することで、後のプロトアイデンティティ理論の原型を既に提示していたのである。

さらには、「偶然の蓄積が發展になつたのではなくて、はじめから發展へと方向づけられてゐたもののように見える。その方向づけが勿論一々の生物に目的として意識されてゐたわけではない。しかしこの方向づけは一々の生物に、いやこの世界といふ體系に内在する自己完結性の然らしめたものでなかつたか」(同書, 193ページ)として、「自己完結性」という概念を登場させ、目的論とも見える発言までしていたのであった。

このような主張を受け入れながら、あるいは少なくとも拒絶せずにおきながら、後年の今西進化論を否定するという、矛盾しているとしか思われぬ態度を示す科学者や研究者がおおかたを占めることには、伊谷が推定する、以下のような理由があるためなのであろうか。それとも、伊谷の考えとは異なり、そのようなものとは異質の、科学者に疑念を抱かしめる何らかの要素が後に付加された結果なのであろうか。いずれにせよ、ここに大きな謎があること自体はまちがいない。

伊谷は、この問題を次のように説明する。今西は、進化にかかわりがありそのような現象に広く着目し、カゲロウ類や日本アルプスの植物の垂直分布の指標種から、海外での探検の中で接した動物種に至るまで、多種多様の動植物に接してきた。しかしながら、自らの手で本格的な調査を行なつたのは、1950年の都井岬の半野生馬が最後なのである。そのような事情があるためであらう。進化論の展開に際しては、昆虫から人類に至るまで、さまざまな動物種が登場す

るし、棲みわけからリオリエンテーション説に至るまで、進化に関する視点も実に多様であるが、「いずれも断片的で挿話的で、一番大事なセオリーのソースとなると、やはりカゲロウに帰ってゆく」のである（伊谷，1993年，516-517ページ）。ここで伊谷が言おうとしているのは、それでは説得力に欠けるということであろう。

伊谷が難点としてとりあげているものは、もうひとつある。今西の農学部昆虫学教室の後輩で親しい間柄にもあった、世界的に著名な昆虫学者、岩田久二雄は、ハチの習性研究で得られた、習性の定向進化および平行進化を示す証拠になりそうな資料を提示しているし、伊谷自身も、霊長類の社会構造（伊谷，1972年）に見られる「歴然とした」定向進化および平行進化の証拠を提出している（伊谷，1987年，315-319ページ）。にもかかわらず今西は、熟知しているはずの、ハチや霊長類に関するこれら「二つの歴大なファクトのマス」を、その進化論の裏打ちとして利用することをしていない（伊谷，1993年，517-519ページ）。この点でも、説得力に欠けるということなのであろう。

伊谷は、今西の「変わるべくして変わる」という表現についても、独自の見かたを示している。今西は、『生物社会の論理』（1954年，毎日新聞社）の中で、カゲロウ幼虫の分布を地図で現わす場合の問題点を検討し、縮尺度論を提起している。それは、今西の説明を援用すれば、次のようなものである。2百万分の1の**小梯尺**の日本地図に示したのでは、どの地域に分布しているかはわかるが、それは「種としてのほんとうのあり方を、現わしたものではない」。それに対して、ひとつの川でのカゲロウ幼虫の現実的、具体的な分布を現わす場合には、千分の1程度の**大梯尺**の地図を用いる必要がある。どちらが正しくて、どちらがまちがっているということではなく、「大梯尺的な地形図も、小梯尺的な地形図もあってこそ、はじめてわれわれに、地表の構造が細大もらさず〔註4〕わかるのである（今西，1949年，104-108ページ）。

その一方で今西は、『生物の世界』の時代から、進化における自己完結性という特性を、生物界に遍く見られる平行進化の根底を流れる法則と考えていた。生物種を忠実に比較する限り、それこそが、そこから読みとれる進化の実

〔註4〕 この今西独自のとらえかたは、第5章で示すように、今西の最も忠実な後継者である小田栞進二がきわめて有効な形で使っている。その研究によって、今までほとんど無視されてきた生物の分布というものの実態がさらに明確になるのである。

像であり、おのずと示される法則のひとつであるというのである。にもかかわらず、なぜか今西は、時間や歴史に対しては、縮尺度論を適用していないと伊谷は指摘する。^[註5] その結果として、「変わるべくして変わる」という、合理的説明を打ち捨てた表現を使うことになったのではないかと主張するのである（伊谷，1993年，516-520ページ）。大梯子を時間軸に適用して、ハチや霊長類の社会構造や行動の進化史を遠目で眺めれば、定向進化や平行進化の実像が自然に浮かび上がるということなのであろうか。

これらの説明は、いずれも、今西進化論が専門家に受け入れられない原因を、通常の意味での説得力の不足に求めるものである。しかし、いわゆる説得力の強弱という問題なのであろうか。伊谷の示唆に従って、裏打ちを確実なものにすれば、さらには、時間や歴史に縮尺度論を適用して定向進化や平行進化の跡を、それが可能であるとして、明瞭に浮き彫りにしさえすれば、今西進化論は専門家にも受け入れられるものになるのであろうか。

水棲昆虫の研究をした経験もある、淡水生物学者、川那部浩哉（当時、京都大学生態学研究センター長）は、『生物の世界』を専門家向けに書き直したという今西の『生物社会の論理』について述べる中で、この問題に関連する実に興味深い指摘を行なっている。

「今西さんの仮説的結論は、彼の挙げた〈論拠〉とは全く別に、どうも正しいらしいのだ。」私はイワナの分類と系統について雑談する（一九八二）にあたって、今西さんの一九六三年の文章を対象にこう書いたことがある。^[註6] 「根拠はまず殆どないし、論理の運びには透き間が多すぎる。しかし…」との意味であった。すなわち、このただものではない直感も、後年のいわゆる「進化論」にも透徹している。「今西さんのこの本は、それに流れる

[註5] 今西は、テオドル・アイマーによる、個体の成長と種の進化のアナロジーを紹介している。乳幼児、少年、青年、壮年、老年という順に写真を並べると、ひとりの人間が、自己同一性を保ちながら、時間の経過とともに次第に変わって行く様子がわかるというのである（今西，1978年b，188ページ）。これは、伊谷の意図とは異なるが、今西が時間軸に対して縮尺度論を、アナロジーを介した形であるにせよ適用した実例と見ることができるように思う。

[註6] 1963年の論文には該当するものがないので、1962年に脱稿され、『自然——生態学的研究』（1967年，中央公論社）に収録された「イワナ属」という論文のことではないかと思われる。

人には何事も生ぜず、それに対決する人を動かす力を持っている。』『論理』
 『生物社会の論理』についてこう書いた先の私の結論は、今西さんの他のす
 べての著作についても当てはまりそうだ。(川那部, 1992年, 35ページ。傍点
 =引用者)

水棲昆虫の専門家である大串も、これを、「今西の天才的といってもよい直観」
 (大串, 1992年, 31ページ)という言葉で表現している。今西とじかに接した者は、
 そのような印象を強く受けるのであろう(たとえば, 本多, 1998年, 281ページ参照)。
 登山や探検の中で発揮されたとされる直観(たとえば, 今西, 1981年, 88-90ペー
 ジ)は、伝説のように語られるほど鋭いものではなかったという証言もあるが、
 このような意味での直観は、相当に鋭かったのであろう。

伊谷は、今西の根本的主張に正当な評価を与える一方で、その根拠の不足を
 問題にしていたわけであるが、反今西として知られてきた川那部(伊藤, 1992年,
 47ページ)も、同じような印象を、しかも、驚くべきことに、その進化論につ
 いても抱いていたということである。伊谷は他者の説得という側面を強調して
 いるので、その点では違っているが、両者は、今西進化論の裏づけが弱いと見
 ていた点では共通している。

心身医学の草創期の研究者であり、後にヴァージニア大学精神科で主任教授
 を務めたイアン・スティーヴンソンは、世界中から2千数百例にもものぼる生ま
 れ変わりの事例を集め、可能な限り詳しい調査を行なったうえで、そうした現
 象の実在を裏づけるさまざまな証拠を一流の医学雑誌(たとえば, *American Journal*
of Psychiatry, *JAMA*, *Journal of Nervous and Mental Disease*, *Lancet*)などに数多く発表し
 てきた[註7](たとえば, Schouten & Stevenson, 1998; Stevenson, 1977a,b,c; 1983, 1999; Stevenson &
 Pasricha, 1979; Stevenson & Samararatne, 1988)が、ある専門家から「20世紀のガリレオ」

[註7] わが国の科学者の圧倒的多数は、この種の研究を「オカルト」であり「うさんく
 さい非科学的信仰」にすぎないとして即座に却下する。しかしながら、それは科学的
 態度ではない。明治期になって西洋からわが国に科学が移入されたわけであるが、
 それから150年以上が経過した現在でもなお、西洋の科学的精神はわが国に根づいて
 いない(今西, 1986年, 21ページ; 岡田, 1994年, 208-209ページ参照)。科学とは、主と
 して実験と観察という科学的方法を使った自然界の真理の探究のことなので、対象を問
 うものではないからである。この問題については、拙編著『サイの戦場——超心理学
 論争全史』(1986年, 平凡社)で詳細に扱っているので、関心のある方は参照されたい。